

適性検査1

注 意

- 1 検査開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 2 検査時間は四十五分間で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 問題は

一	問1
二	問1
三	問4

 から

一	問3
二	問4

 まであります。
- 4 問題用紙は1ページから13ページまであります。
検査開始の指示後、すぐにページがそろっているかを確認かくにんしなさい。
- 5 解答用紙は二枚まいあります。
- 6 受検番号をそれぞれの解答用紙の決められた場所に記入しなさい。
- 7 解答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙のみ二枚とも提出しなさい。

このページには問題は印刷されていません。

問題は次のページからです。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(*印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

陽子ようこには、耳の機能が弱く、音が聞こえにくい静香しずかという双子ふたごの妹がいる。陽子は、妹にかかりきりの母の気を引きたいという思いもあって競技きぎかるたを始め、ぐんぐん上達した。

大会前の練習日、悪天候のため陽子は母に車で迎えむかに来てもらった。陽子は、母がそのことについて妹に手話で不満ふまんをもらしているところを見てしまい、シヨックを受ける。帰宅きたく後、陽子が自室で泣いていると母に「陽子は聴きこえるんだし、ひとりでもできるでしょ」と言われた。陽子は最高の笑顔えがおで「分かりました。もう何も言わない」と答え、それ以来、母とは口をきいていない。夏休み中、陽子は母と顔を合わせるのをさけるため、喫茶店きっさてんでアルバイトをしていた。

ドアが閉しまると、オーナーは感心かんしんしたようにアタシを見る。

「陽子ちゃんってさ、いろんな魅力みりょくがあるよね」

「えっ。手話てわができたからですか？」

「あら、謙虚けんきよね。まだまだあるわよ。オーダーおーだーを厨房ちゆうぼうに伝

える声、とてもキレイに通とって気持ちがいい。何事なにも否定ひていせず
に聴きいてくれるから、話しがいもあるし……」

オーナーは指折さしり数えながら、アタシの良いところを、いっ
ぱい挙あげていつてくれた。

初めての気持ちだ。なんだろう、水中から浮うき出でたような、
扉とびらのない部屋から解放かされたようなこの感情かんじは。

努力どりょくして身につけた競技きぎかるたの技わざや、心こころを押おし殺ころして笑わらみ
を浮かべてきたこと以外にも、アタシには魅力みりょくがあったんだ。

このままで、ありのままがいい。

① 厠たてにひびが入り、音を立てて崩くずれて地面に広がる。でも、
恐怖きょうふはなかった。すっきりした、晴はれやかな心地だ。

「素す」のアタシを見て、オーナーは微笑ほほえむ。

「陽子ちゃんが来てくれて、本当に楽しい夏なつだったわ。あり
がとうね。そうだ、もしも時間が大丈夫だいじょうぶなら、これからソー
ダまんじゅうを一緒いっしょに作つくらない？ あ、栃木とちぎだから炭酸たんさんまん
じゅうか」

料理りょうりなんて、学校の授業じゆぎょうでやった程度ていどだ。でも、さっきの味
を自分で再現さいげんできたなら楽しいかも。素直すなはちに頷うなずいた。まだオー
ナーと一緒にいたいし、心配しんぱいするかは知らないけど、自宅じたくには
遅おそくなる*とファックスでも入れておけばいい。

厨房でオーナーは「小麦粉、砂糖、重曹、餡子……」と言いつながら材料を調理台に出していく。餡子は缶詰だった。

「気楽に作るのが一番よ。さ、まずは重曹を入れた粉を二回ふるう。腕力勝負だけど頑張つて」

オーナーに励まされながらふるって、気づいた。

「なんか楽しいです。こう、発散される感じで。ダメが崩れていくのが、これまた気持ちがいいです」

「うふふ。パン作りはもつといいわよ。生地きじの空気を抜く時、台たに叩たたきつけるの。こう、ビシッバシッと。ストレス解消に最高なのよね」

「オーナー……、パンを焼くのは」

「そう、イライラが溜たまった時。だから『気まぐれメニュー』なのよ」

顔を見合わせて大爆笑だいはくしょうした。

生地なまこで餡子あんこを包み丸めて十二分蒸むし、蓋ふたを開けた時の炭酸たんさんまんじゅうの可愛かわいらしさに、ときめいた。ほのかに黄色きいろく、丸々とふつくら。小鳥こどりみたいだ。

できあがりは十個じゅうこだった。一個は記念にとオーナーが受け取り、残りは「御家族ごかぞくのお土産みやげになさい」と袋ふくろに入れて持たせてくれた。そして、別に大きな紙袋も。

「これは、私わたしからの気持ち。陽子ちゃんのこれからの人生が、ますます豊かになることを願つて。このお店でアルバイトをしてくれて、ありがとうね」

商店街のオリオン通りは、夜になると人通りがパツタリ途絶とだえる。急ぎ足で大通りに行きバスに乗った。揺ゆられながら袋を覗のぞいてみると、アルバムみたいな大きな本が入っていた。表紙は星が煌きらめく宇宙うちゅうの写真で、タイトルは『星座散歩せいざさんぽ』とある。カウンターにあった本だ。

厚い紙が挟はさまっていることに気づき、開いてみるとオリオン座のページだった。星をつなぐ線りょうしが猟師りょうしのイラストに重なっている。オリオンはギリシャ神話に出てくる猟師だと記述されていた。

そうか、神話ができた時代にはもう星座があったんだ。

同じ星空を、人類は見続けてきている。日記に書いたり詩を読んだり……何百年何千年、そして何万年も。

挟はさまれていたのは、小さな色紙だった。オーナーの筆跡ひっせきで書かれていたのは……。

「*オリオンは 聲こゑなき天てんの聖歌隊せいかたい——」

野尻抱影のじりほうえいの詩だ！

あらためて、そのページを眺ながめてみた。オリオンのベルト

のあたりには「オリオン大星雲」が広がり、新たな恒星が誕生し続けているとある。そして、「オリオン星雲は若く、まだ一万年」だと。

「まだ、一万年……」

そうつぶやきながら、オーナーが話していた伝説の皆既日食を思い出した。

——どれだけすごいかという、一〇八〇年六月から二二五〇年六月の間で一番長いという。

宇宙スケールで見たら、十八歳の自分なんて塵みたいな存在だろう。星が見えるかと窓の外に視線を移したら、車内の明かりに引き寄せられたらしく小さな虫がくっついてた。風圧に負けじと、必死にへばりついている。

ちっぽけだけど、アタシも生きている。息をして、鼓動がある。塵でも、この一瞬、確かにここにいます。

落ち込んでいる暇なんてない。なんで一か月以上も母と口をきかなかつたんだろう……。

帰宅すると、もう二十一時近かった。リビングのソファに母だけがぼつりと座っている。遅くなる娘を待ってたんだろうか。

「……おかえり」

今日も返事はないと思っているのか、すぐに目を伏せる。

「ただいま」

母はピクツと肩を震わせた。何を言おうかバスの中でずっと考えていたけど、自分でも驚くほど自然に言葉が出てきた。

「……今日ね、バイト先に聴覚障害のお客様が来たんだよ。アタシが手話で話したら、すごく喜んでくれたんだ」

アタシの盾はもう無い。素の顔を晒すのがちよつと気恥ずかしくて、下を見て頬を掻いた。

いつものように「ふうん」と聞き流すかと思ったら、返事がない。

どうしたのかと顔を上げたら、視線が合った。母がアタシを見ている。見つめている。唇を噛みしめて頬を震わせながらその瞳がみるみる潤み、目から溢れたものが一筋二筋と頬を伝っていった。

母の泣き顔なんて、初めて見る。もしかして、静香が難聴の告知を受けた日以来じゃないだろうか。思い返せば、母子手帳の慟哭の文字は水滴でにじんでいた。

母の中の何かも今、壊れたのかもしれない。

「こ、これ炭酸まんじゅう。アタシが作ったんだけど、静香と食べて」

袋をテーブルに置くと、自分の部屋に逃げ込んだ。「競技か

るた練習中。入るな」と紙に書いてドアに張る。そのままサツシ戸を開けて床に座り、空を見上げた。

街の明かりが邪魔をするけれど、確かに星々が輝いている。でも、どれがなんの星だかさツパリ分からない。

ドアがノックされ、振り向いたら妹が入ってきた。片手に食べかけの炭酸まんじゅうを持ち、困ったような表情で口話をした。

「部屋に入ってごめんね。お母さん、泣いてるんだよ。理由訊いても教えてくれなくてさ。心配しないとは言っただけど」

「なんだろうね。イヤなことが理由じゃないなら、いいんじゃない？」と口話で返そうとしたけれど、今日のお客様を思い出した。手話を通じると分かったら、とても嬉しそうだった。

ちよっと試してみようかと、口だけでなく手も動かしてみた。静香と母の世界に、片足を踏み入れてみる。

「！」

妹の目が、かつてないほど真ん丸になった。手に持った炭酸まんじゅうを一気に頬張り、アタシを指さした後、両方の人差し指を向き合わせてくるくる回す。「手話」の意味だ。

〈手話できるんだ！〉

〈そりゃ、毎日あんたとお母さんを見てれば覚えるよ〉

〈お姉ちゃんは競技かるたに一生懸命で、手話を覚える気

がないのかと思ってた。私と遊んでくれないしさ〉

〈だって、静香はお母さんといつも一緒じゃん〉

静香は苦笑いしながら首を横に振る。

〈遊びたいよ、そりゃ。毎日訓練で辛かったし〉

〈……ねえ、静香。アタシの手話ってどう？ 下手？〉

正直に言うべきなのか少し戸惑っていたようだけど、肩をすくめた。

〈間違もあるけど、まあ、通じるよ。口話に例えると、聴者のお姉ちゃんが私の発語を聴いた時と同じくらいなんじゃないかな〉

そういうレベルか。でも、今日のお客様の様子を思い出すと、もっと上手になりたい気もする。

〈明日から、手話教えてくれない？〉

② 静香は目をさらに見開いた。

〈でもお姉ちゃんは、競技かるたの練習忙しいんじゃない？ 日本一目指すんでしょ？ なんだっけ……そう、かるたクイーン〉

アタシが目指すもの。

〈いや、バイトして思ったんだよ。時には違うことをするのも必要だなと〉

隣となりに腰こしを下ろした静香に、本に挟はさまっていた色紙を引き抜いて渡わたす。

〈今日けふさ、バイト終しゅうり了りょう記念きねんにこの色紙をもらったの〉

静香は自分の指先についた炭酸まんじゅうの生地が気になったのか、色紙を受け取らずに覗のぞき込んだ。

〈…へえ。キレイな詩だね。星の合唱ごうってどんな風かぜに響ひびくのかな〉

〈分わかんない〉

〈お姉ちゃんおねえちゃんは聴者ききやなのに〉

妹は笑い、姉妹揃そろって夜空を見上げた。聴こえる自分、聴こえない静香に星の歌はどう響くのか。正解はそれぞれの心にあるのだ。

アタシは左手で丸を作り、その手前に弧こを描かいて右手を動かす。「日食」の手話だ。

〈日食で空が真っ暗になる時、太陽の光に消されていた星が見えることがあるんだって〉

〈面白おもしろいね。引ひっかき絵えみたい〉

〈なにそれ〉

〈若草わかくさろう学校がっこうの幼稚部ようちぶでよくやったんだ。画用紙にいろんな色のクレヨンクレヨンを塗ぬって、その上を全部黒で塗りつぶしたあと、

竹串たけぐしで引ひっかくの。すると、下にあるカラフルな色が見えてくる〉

〈アタシの幼稚園でも、やった!〉

ふたりの世界が交まじり合あう。静香は〈私、口話くわが得意とくいじゃないから、今までお姉ちゃんおねえちゃんとあまりおしゃべりできなかった。寂さびしかったんだよ〉と笑った。

ずっと、静香は聴こえない世界の住人すまひでアタシは聴こえる世界の住人だと思おもっていた。もしかして、ふたりの世界は重なっていたんじゃないだろうか。皆既日食の星空のように。同じ空でも光の加減かへんで見える姿すがたは違ちがうけれど、「ひとつの宇宙」なのだ。明日が始業式しぎやうしきだというのも忘わすれて、遅おそくまで手話で語り合あった。炭酸まんじゅうを食たべながら。

(村崎むらさきなぎこ『オリオンは静しずかに詠うたう』問題のため一部改編)

〔注〕

*競技かるた：小倉百人一首の札を用いて、全日本かるた協

会が定めたルールに従って行う競技。毎年一

月に開かれる大会での優勝者は、名人・ク

イーンと呼ばれる。

*オーダー：注文。

*厨房：お店の調理室。

*心を押し殺して：自分の感情を表に出さないようにすること。

*ファックス：文章などを送受信する技術。

*重曹：ケーキやクッキーをふくらませるために使われる材料。

*ダマ：粉類が固まったもの。

*ギリシャ神話：古代ギリシャで語りつがれていた神話で、

オリオンという伝説の猟師が登場する。

*オリオンは：以前、オーナーが陽子に教えてくれた詩。「オ

リオンは 聲なき天の聖歌隊 雪晴れの刃金

いろの空で いっせいに煌くが而も寂とし

て 宇宙の深い深いかなたから 光の合唱を

送ってくる」

*野尻抱影：日本の英文学者。

*恒星：太陽のように、自ら光を出している天体。

*皆既日食：太陽と地球の間に月が入りこんで、地球から見

たときに、月によって太陽が完全にかくれる

現象。

*聴覚障害：周囲の音や話し声が聞こえにくかったり、ほ

とんど聞こえなかったりするために、日常生

活に支障がある状態。

*難聴：耳の機能が弱くなって音が聞こえにくい状態。

*母子手帳：母子の健康管理のための手帳。前の文章で、陽

子が妹の母子手帳を見たことが書かれている。

その母子手帳の文字はにじんんでいた。

*慟哭：悲しみにたえ切れず激しく泣くこと。

*サッシ戸：部屋とベランダの間にある戸。

*口話：口の形や動きから話を読み取り、会話する方法。

*聴者：耳で音や言葉を聞くことができる人。

*ろう学校：周囲の音や話し声が聞こえにくかったり、ほとん

ど聞こえなかったりする子どもたちが通う学校。

問1

① 盾にひびが入り、音を立てて崩れて地面に広がる とありますが、それは誰が何をしたことがきっかけとなっていますか。解答らんに合うように具体的に書きなさい。

問2

② 静香は目をさらに見開いた とありますが、それはどうしてですか。解答らんに合うように具体的に書きなさい。

問3

本文中に 光の加減で見える姿は違うけれど、「ひとつの宇宙」なのだ とありますが、本文の内容をふまえて、同じような体験や具体例を書きなさい。その際、次の条件にしたがうこと。

条件1 書き出しは一まずめから書き始めなさい。

条件2 文章は、六十字以上七十字以内で書きなさい。
、や。や「なども一字と数えます。

条件3 本文と同じ場面や例はさけること。

□ 次の文章Ⅰと文章Ⅱを読んで、後の問いに答えなさい。

(*印のついている言葉には、本文の後に「注」があります。)

文章Ⅰ

私たちは、ついつい意味と音との結びつきが固定的だと思いがちです。とくに意味は、特定の単語にもとから備わっていて、その単語からA⇨Bといったように自動的に意味を理解する、おもと思いいちでこいます。

でも、日常の言語ではその場ごとに〈意味のまとめ〉が必要な意味を表に出してくるのです。カメレオンが、自分のいる場所に合わせて、色を変えるように。「花」は文脈によって「花束」であり、「桜」であり、「華やかな人」であるように。

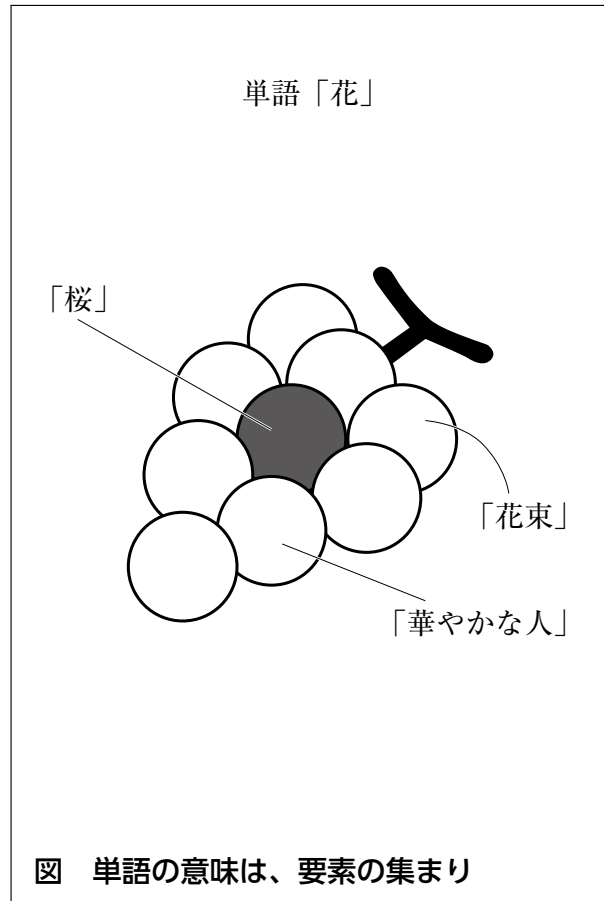
言語は、単語を文法でつなげます。しかしその文法とは無関係に、単語どうしがネットワーク、〈意味のまとめ〉を作っています。

〈意味のまとめ〉は、パズルのピースのように平板へいばんではな

く、ブドウの房ふさ(クラスター)*のような要素の集まりです。ただし、ブドウの場合は、いつもその全体像を手にとることができますが、意味の場合は、話されるさいに「ブドウの房」のなかから文脈に合わせて、適切な一粒ひとつぶあるいは何粒かが表面に出てくる感じかんじです(図)。

辞書のように、話される個々のケースを分類し、分析ぶんせきすると、意味の項目こうもく一覧いちらんのようになります。しかし、この一覧表が常に意識されることはなく、場面ごとに特定の意味が意識されるわけです。

〈意味のまとめ〉のうち、このようにして意識されない部分は、話したり聞いたり、書いたり読んだりする現場で、まったく機能しないかというところ、そうではありません。それはその場その場で、表に現れる中核ちゅうかく的な意味の周りや底辺部に潜ひそんでいるながらも、意味の方向性を決定づけます。以前も述べたように、意味のまとめかたは、それまでの言語文化における習慣などによって、言語ごごごとに違ちがいます。



現実の言語行為に即するならば、言葉の意味を理解するとき、私たちは言葉の意味を垂直方向に考える必要がある、ということになると思います。〈意味のまとまり〉が、その場では見せていない他の多くの意味が、表面に浮かび上がった意味の下に数多く連なっている、と考えるといいでしょう。

「話す・聞く・書く・読む」といった言語行為は、このような〈意味のまとまり〉が音や文字と結びつくことです。この結びつきは、人が話したり聞いたり、書いたり読んだりするたびに生じます。結びつくさいに微妙な違いが入り込むことで、言語は変化してゆくと考えられます。「まじめ」という言葉は文脈によって褒め言葉にも揶揄にもなります。

① 常に変容するという点が重要です。

意味がどのようなまとまりかたをしている（クラスターを形成している）のかを説明できれば、言葉を聞いて間違った理解をすることはグッと少なくなります。意味がどんなふう構成され、どんな風に働くのか知っておくと、誤解の理由に気づけるし、新しいコンセプトを生み出すときにも有用です。

日本語で「文脈を読む」や「空気を読む」という心のスキヤニングは、人間が言葉を使う以上、他の言語でも普遍的に使われています。つまみ上げたい「ブドウの一粒」（特定の意味要

素) にぎゅぎゅっと的を絞るのが語り手自身のように見えて、
実際には、その場の流れが、そうさせるのです。概念のまわり
にある言葉のゆるやかさを押しつけて、これが伝えたいことで
すよでも言うように、意味(あるいは意図)の方が向こうか
ら迫ってくる。それをすくい上げるのが「文脈を読む」や「空
気を読む」です。

(小野純) 『僕たちは言葉について何も知らない 孤独、誤解、
もどかしさの言語学』 問題のため一部改編)

〔注〕

* 平板: 平たい板のこと。また、あまり変化がなく、同じ調
子のこと。

* クラスタ: 同種のもので形成される集団。

* 中核: 物事の重要な部分。

* 即す: あてはめる。

* 揶揄: からかい。

* コンセプト: 物事をつくり出すときに中心となるもの。

* スキャニング: 情報を読み取ること。

* 普遍: すべてのものに共通していること。

* 概念: いろいろなものの共通点を一つの言葉でまとめたもの。

文章Ⅱ

特定の言語を習得することには、当然のことながら、「せつない」「つれない」「いずい」等々のハイコンテキストな言葉を数多く習得することが含まれる。そして、先ほど確認した通り、ハイコンテキストな言葉は、いったん使い方を覚えてしまえば汎用性が高い。コンテキスト（文脈）に応じて多様な意味をもちうるということは、多様なコンテキストを横断して幅広く使えるということだからだ。

しかし、この特徴は、言葉の濫用へと人を誘うものでもある。この場面では本当はもっと違う言葉で表現したり、意味合いの異なる言葉で伝えたりできたはずなのに、とりあえずなんでもこの言葉を使って済ます、という傾向をつくりやすいのだ。たとえば、評判の映画を何本か観て、そのどれにも感動を覚えたとする。感動の中身は映画によってそれぞれどこか違うはずなのに、感想を表現したり伝えたりする際には、どの映画に関しても「すごかった」と言って済ますことができる。「すごい」という言葉の意味はとても曖昧であり、映像が美しいことも、

音楽が壮大であることも、衣装が豪華であることも、脚本がよく練られていることも、オチが秀逸であることも、俳優の演技が上手であること等々も、すべて意味しうるからだ。

しかし、そのように個々の映画の「すごさ」の中身を明確にする努力を一切せずに、いつもなんとなく「すごい」と言っ
て片づける、というのであれば問題だ。なぜなら、自分がこの映画のどういった要素に感動したのか、どこがどう「すごかった」のかを表現する言葉を探し、選び取ることは、ものを考え
るという営みの重要な部分を占めるからだ。逆に言えば、そうした言葉の探索や選択という営みを放棄して、なんでも「すごい」といった汎用性の高い言葉でやり過ぎしてしまうのは、まさに思考停止に陥っているということにほかならない。そこ
では、たんに言語表現が平板化・単純化しているだけではなく、同時に、思考自体が平板で単純なものになってしまっているのである。

（古田徹也『言葉なんていららない？ 私と世界のあいだ』問題のため一部改編）

〔注〕

*つれない…「思いやりがない」「よそよそしい」「さりげない」などの意味をもつ言葉。

*いずい…「しっくりこない」「歯がゆい」「落ち着かない」などの意味をもつ言葉。

*ハイコンテクストな言葉…場面に応じていろいろな意味で用いられる言葉のこと。

*先ほど確認かくにんした通り…前の文章で筆者はある言葉を例に挙げ、一度使い方を習得してしまえばいろいろな場面で使えるということ
を述べていた。

*汎用性はんようせい…一つのものがいろいろな用途ようとに使える性質。

*濫用らんよう…むやみに使うこと。

*オチ…話の締めくくり。

*秀逸しゅういつ…他と比べて特に優すぐれていること。

